

第2回 地図を持って観察にいこう！ ～宝ヶ池～

日時：2021年1月10日（日）

場所：宝ヶ池公園

天候：晴れ

参加人数：18名

2日前から寒波がやってきて急に寒さが激しくなりました。ところが観察日当日は打って変わって日が照りポカポカ陽気で、観察会にはとてもありがたい日になりました。

今回は noi-kyoto が 2003 年に出版した「京都府自然観察地図」を持って歩く会の第2弾、場所は宝ヶ池公園です。この宝ヶ池は灌漑用の溜池として江戸時代中期に作られたもので、最初は湧き水をせき止めただけの小さなものを次第に大きくして江戸時代後期にほぼ現在の大きさになったとされています。1961（昭和36）年に国立京都国際会館が宝ヶ池の北側



宝ヶ池と国立京都国際会館



センダンの実



ユリノキの実



ゲッケイジュの花芽

隣接地に建設されることが決定してから、菖蒲園、憩いの森、桜の森、野鳥の森などの公園の整備が進み、現在に至っています。

結論から言うと、『宝ヶ池公園の地図は今でも十分活用できる』ということです。この地図が作られた18年前から公園の施設や道はほとんど変わっていないことと、それに描かれている内容が本当に丁寧で、正確に作られているからです。ただし、一度訪れただけなので鳥、虫、キノコに関してはほかの季節での確認は必要です。

では、地下鉄国際会館駅5番出口からスタートしましょう。このスタート場所からいろいろな樹木があります。黄色い実がたくさん残っているセンダン、テカテカした光沢のある大きな葉を持つタイサンボク、黒い実のほとんどが食べられて赤い軸だけ残っているトウネズミモチ、青々とした葉を持つシラカシ、石碑のまわりには葉が赤くなっているヒペリカムなどが見られました。

少し歩いてトイレまでの間に、枝振りが細かく小さな実がたくさんなるアキニレ、大きな実が花のように残るユリノキ、大きな赤い冬芽がにゅっと伸びるモミジバフウが大きな実をたくさん残していました。その隣に枯れた木があり、誰かがその枯れた枝を動かした途端にもものすごく強い良い香りが押し寄せてきました。その木は死んでいませんでした。枝を伸ばし丸い花芽をつけ力強く生きているゲッケイジュでした。その後ろには青々とした葉をつけたクスノキ、その後ろには高くそびえたメタセコイアの大木が柵を押しつけるように立っていました。



ジョウビタキのメス

そのあと岩倉川沿いに少し歩きます。岩倉川と言えば、この前の友の会「箕ノ裏ヶ岳」観察会で道の横に流れていたあの川です。川沿いにはサクラ、ハナミズキ、ネムノキ、イロハモミジといろいろな木があり、冬芽や花芽を楽しめました。ジョウビタキが現れジッとこちらを見て、まったく逃げる様子がありません。その横にはまだ実を残したエノキがありました。

岩倉川を渡ると、葉が落ちていないヤマコウバシや、赤い実をつけたマンリョウ、網の目模様がはっきりした葉脈を持つテイカカズラが寒い冬でも青々とした葉をつけて樹にぶらさがる

ようにつるを伸ばしていました。

イトヒバ（園芸種）、ハンノキがそばに生える湿地に来ると先に行ったみんながとてもはしゃいでいます。遅れて着いた自分たちが湿地に入るとサクッ、サクッと大きな音が鳴りました。足下を見ると大きな霜柱ができていました。今まで見たこともないような長さの氷の柱がそこにありました。最近舗装の道が多いのと暖冬のため、霜柱の感覚を忘れていたので、楽しくて何度も霜柱の上を歩きました。



長い氷の霜柱

少し歩くとコナラの森があり、そこを山の方へ登っていく

と、黒っぽい木肌で皮目が目立つクロバイが生えていました。さらに進んで登っていくと、木の根元に丸いおがくずがたくさん見つかりました。嵐山でもよく見かけたものです。調べてみると、ボクトウガのなかまの幼虫が木の中に入ったときの木のかすのようです。このボクトウガのなかまは木に食い入り、木に樹液を出させ、そこに集まってくる虫を捕まえて食べるという肉食のガの幼虫です。クヌギやコナラに入り込むそうですが、なぜかここや嵐山ではネジキに入り込んでいました。肉食のガの幼虫がいることを初めて知りました。驚きです！



ネジキの根元

地図どおりになだらかな尾根道を歩いて行くとチャートの岩が現れ、岩の上からは『子供の樂園』がかなり低い位置に見えました。そこから東山へ行く間に、赤い実がかなり食べられてしまっているカナメモチ、赤い実をつけたソヨゴ、花芽をつけたコバノミツバツツジ、実をつけた

ネズミサシ（ネズ）、新枝が塗り箸のように赤いネジキ、さらにアカマツ、サカキ、アオハダなどがありました。東山を越えたところで、五山の送り火の「法」の上に出ました。そこは急な崖のような場所にあり、大阪まで見渡せるところで日当たりがとても良く、ここでランチをとりました。『あべのハルカス』かと思える建物も天王山のすぐ横に見えていました。

コバノミツバツツジなどの樹木をシカによる食害から保護するための柵が設けられており、その中ではネジキの赤い新枝がたくさん残っていました。コバノミツバツツジの花芽も



チャート

食べられていません。柵を使って保護しない限りシカによる食害から逃れられないのです。自然を取り戻すために、野生の動物と上手に共存する方法を早く見つけ出す必要があります。

そんな食害にあっている森の中でもアセビは食べられずに、もう花まで咲かせていました。アセビがシカなどに食べられていないのは有毒だからです。



アセビ



ラクウショウ（ヌマスギ）

宝ヶ池が見えてきました。池の畔を回っていきます。野鳥の

森ではルリビタキが飛び回っていましたが、私は見つけることができませんでした。水辺にはラクウショウ（ヌマスギ）の吸気根がはっきり見られるところがあり、その横にある栈橋のそばにクロミノニシゴリと思われる木がありました。瑠璃色の実のサワフタギは別名ニシゴリ。これに対して黒実なのでクロミノニシゴリというそうです。春になって葉が出たときに再確認しに行きましょう。ハンノキはもう雄花を伸ばしています。



ハンノキ

空を見上げると真冬だというのに信じられないくらいの青空。そこに 20 羽以上のトビが飛び回っています。こんなにたくさんのトビを一度に見たのは初めてです。誰かがエサをあげていたようです。

池にはたくさんの水鳥がいました。まずはくちばしから額にかけて白いのが特徴のオオバン、頭が緑色になっていて体が灰白色なのはマガモです。頭や背中が黒くて腹側が白くてよく目立っているのがキンクロハジロ、キンクロハジロに形が似ていて頭が

茶色で体が灰白色なのがホシハジロです。この「ハジロ」の名は広げた羽が白いところからきていて、「キンクロ」とは眼が金色で体が黒いからだそうです。そして、「ホシ」はからだの灰白色の細かい縞模様が星のように見えたからといわれます。双眼鏡などを使ってホシハジロの背中をじっくりと観察するとすごく細かい模様が見つかります。一見するとべったりとした灰色のように見えるのですが、じっくり観察するといろいろなことに気づかされます。



キンクロハジロとマガモ

オシドリ

最後に、オシドリを見つけました。自然界で初めて見ます。残念ながらオスしか見られませんでした。本当に色鮮やかな鳥でした。オシドリは樹洞に巣を作り、雛（ひな）は高い木の上にある巣から自分で地面

に飛び降りて巣離れをします。この地図を持ってまた違う季節に訪れ、新たな発見を地図に書き込んでいきたいです。

文責 細川幾由